

帝京大学緩和ケア内科ジャーナルクラブ (2017年3月9日)

担当：大学院4年 久保佳子先生

Weight loss versus muscle loss: re-evaluating inclusion criteria for future cancer cachexia interventional trials.

Roeland EJ et al. Support Care Cancer. 2017 Feb;25(2):365-369.

(リンク先 <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/27628947>)

**【目的】** がん悪液質に関する臨床試験では、体重減少が適格基準とされていることが多い。CT画像を解析して得られる筋肉量の減少は、悪液質の代替指標になり得ると考えられている。本研究では、がん悪液質の臨床試験への適格性を判定された患者を対象に、体重減少と筋肉量減少との関連を比較した。

**【方法】** がん悪液質に対する介入試験への適格性（直近6ヶ月での体重減少が5%以上）を判定された患者を対象とした、単施設の後方視的研究である。日常臨床の一環として撮影されたCT画像を用い、筋肉量と脂肪量の変化を解析し

た。

【結果】適格性を判定された 36 例のうち、3 例（8%）が臨床試験の適格基準を全て満たした。17 例（47%）は体重減少が 5%に満たず、3 例（8%）は体重減少が 20%を超えており、16 例（44%）が体重減少に関する適格基準（5-20%）を満たした。体重減少が 5%に満たなかった 17 例のうち 7 例（41%）は、筋肉量の減少が 5%を超えていた。

【結論】体重減少によるがん悪液質の定義は、筋肉量の減少を十分反映していないことによる限界がある。CT による体組成分析は、筋肉量減少の早期発見と今後のがん悪液質に関する臨床試験への患者組入れに有用な可能性がある。

【コメント】体重減少と筋肉量減少は、いずれもがん患者の予後不良因子として知られている。いわゆるがん終末期には、体腔液の増加、浮腫、腫瘍そのものの重量増加により、体重減少が過小評価される可能性がある。今回の解析で、体重減少と筋肉量減少の間には比較的良好な関連があったものの、体重減少

が軽度とされた患者の約4割で筋肉量の減少がみられたことは、体重のみの評価ではがん悪液質の患者を拾い上げきれない可能性を示唆している。では体重減少と筋肉量減少のどちらが、より鋭敏に予後や悪液質に関連した症状を予測するのか？という疑問には本研究で答えられていない。体重減少と筋肉量減少に良好な関連があった以上、CT画像の解析という（比較的）煩雑な方法を用いて筋肉量を評価することが、単に体重を測定するよりも臨床上明らかに有用であると示されることが必要である。